

# 「漆器作品を通じた地域振興への取組」

香川県立高松工芸高等学校

教諭 田 淵 力

## 1 はじめに

＜香川漆芸と地域振興＞

香川漆芸は彫漆、蒟醬、存清、後藤塗、象谷塗の5つの技法が国の伝統的工芸品に指定されている。本校は工芸科漆芸コースを中心に漆器産業の担い手を育成するとともに、多くの著名な漆芸作家を輩出している。しかし、伝統的工芸品産業は生活様式の変化や大量生産方式による安価な生活用品の普及などから、需要の低迷が続いており、香川漆芸の普及と後継者の育成が課題となっている。そのような中、県から高松工芸の生徒に香川漆芸をPRする活動をさせてほしいとの依頼があり、今回の取り組みが始まった。

## 2 実践の内容・方法

### (1) もの作り同好会 Creative7 の創設

こうしたことを踏まえながら、本校の漆芸教育の技術と生徒の若い感性を生かし、地元香川の漆器産業を活性化できないかを検討した。全日制7科がそれぞれの専門性を生かしながら、横断的に協力し合い作品作りができるよう『Creative7』として同好会を設立し活動することとした。創立120周年を迎える本校にとっても科を横断しての制作活動は初めての試みである。

#### ① 学校の組織づくりと作品制作

本実践では、今までに無い発想での作品制作を行い、作品を発表することで高い話題性を生み香川漆芸に注目を集め、業界を活性化することを目標とした。工芸科漆芸コースを中心に各科が連携しできるよう、各科に担当教諭を配置してもらった。全校生徒への呼びかけで、もの作りに意欲のある工芸科の7名が入部してきた。生徒たちの柔軟な発想や様々なアイデアに対し専門性を反映させ対応しまとめる。制作では作業に応じ各科実習室が使用できるようになり多くの魅力あふれる作品が制作されはじめた。

#### ② 独自性のある作品制作

県内はまだしも県外になると香川漆芸の認知度は低い。また香川漆器はその技法から行程も多く、材料も大量に使うため値段が高い。生徒たちと考えたことは、安価で普段使いができ、手に取ってもらう機会を増やすことで漆器の良さを発見してもらえる「ちょっとうるし、ちょっとうれし」という考え方である。そうしながら漆器に興味関心を持つ人を増やし、購買者の意欲を高める効果を上げ、少しでも漆器業界の活性化につながればと考えた。作品を制作するうえで、レーザー加工機や3Dプリンタ、真空吸着ロクロといった最新機器を使用する制作を考案し、量産することで価格を安く抑えるよう工夫した。伝統を継承しつつ新しい機材や技術を投入し新境地を模索し提案する。図柄や制作物といった点で若い世代が「欲しい」と思うものを生徒が意見交換し制作した。

### ③ 香川漆芸の広報活動

より多くの話題性を得るために、ワークショップや各種イベントに参加し、積極的に活動することとした。栗林公園内の栗林庵では、一般の方々を対象に漆を使用した作品制作を体験できる「漆」ワークショップを開催し、漆キーホルダーや漆マグネットの制作を行った。県内外の方々や外国人観光客など、多数の参加者があり、生徒たちが熱心に制作指導し香川漆器のPR活動を行った。夏休みには本校で中学生を対象に漆体験教室を実施し、漆マグネットの制作を行った。ここでも生徒が熱心に制作指導を行い、中学生の興味関心を引いた。また、秋には工芸展で作品発表と販売を行った。2月には東京新橋にある、「香川・愛媛せとうち旬彩館」で年度の締めくくりとして、生徒8名で一週間のPR活動を行った。ここでも制作した作品販売や、接客業務を行った。

その他の広報活動として、県内企業や伝統工芸の各組合との連携制作を行った。他団体とのコラボレーション企画は、その相乗効果により、漆単独で得られる話題性よりも高いPR効果があった。

全国的に松盆栽で有名な高松国分寺町の盆栽組合から、漆を活用した盆栽台の依頼を受け、作品の開発を行った。盆栽祭にも参加することとなり、展示ブースを設け生徒が作品説明を行った。この他にも、花崗岩で有名な、庵治石の業者とコラボレーション企画を持ち、漆を施した食器の制作を考案し、コースターや盛皿を制作した。また、むれ源平石あかりロード実行委員会にも協力し、石あかりロード開催時には、ことでん八栗駅前に漆と庵治石を使用してのオブジェを制作し展示した。生徒たちは実行委員会にも出席し、企画段階から参加し運営や制作活動にあたった。

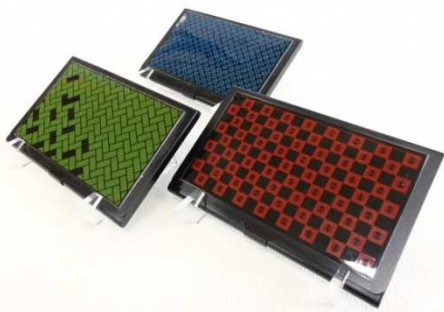
地元企業とのコラボレーションでは、仏壇のカナクラから依頼をいただき、仏壇の制作を行うこととなった。仏壇についての講義を受け、基礎的な知識を得た後に、情報を収集するため全校生徒にアンケートを取り、新しい発想の仏壇を考案した。アンケートからは「現代の生活様式に合った省スペースのものが望ましい。」「仏壇には“怖い・暗い”といったイメージがある」という結果が見られた。それらをコンセプトとして、大きさはキャビネットや棚の上に置けるように小型のものとし、球体の形状で透明アクリル素材や天然木の素材を使用することで「怖い・暗い」のイメージを感じさせないものとした。その後カナクラからの修正を経て完成した。作品は企業の仏壇展示会にて一般の方々へ発表し、ニュース、新聞に大きく取り上げられた他、業界の専門雑誌に初の高校生作品として大きく取り上げられる事となった。



【栗林庵 漆ワークショップ】



【せとうち旬彩館 漆PR活動】



きんま  
【蒔髹風名刺ケース】



【陶胎漆器 タンブラー】



【省スペース型 漆塗り仏壇】

### 3 実践の成果

#### (1) 学校内の変化

Creative7は、その名の通り7つの科がそれぞれの専門的な分野を担当しながら、相互に協力し活動している。実際の制作では必要とする機材のそろそろ実習室で作業することも可能になった。漆器制作を通して連携し、協力しあったことで、単体で存在していた科の関係がとても強いものになっていることを実感した。また、Creative7の専用機材であるレーザー加工機や3Dプリンタなども各科の課題研究等で貸し出すなど各科でもCreative7担当の先生が最新機材を使用しての授業が始められている。

#### (2) 作品開発

陶器に漆を塗って仕上げた陶胎漆器のうどん鉢やタンブラー。彩漆板を使用しているコンパクトミラー。堆漆を使用した名刺ケースなど、中には工芸独自開発の技術による作品などもあり、たくさんの魅力あふれる作品が制作された。それは手仕事の作業に機械での制作行程をプラスすることで、仕事の効率を上げるだけではなく、手作りでは不可能なことにも挑戦できるようになったことが関連している。また機械を操るオペレーティングといった新たな学習ができるようになり、手で制作できる生徒が機械を使用することで、完成度の高い作品制作が可能になると感じた。

#### (3) 広報活動での成果

作品制作はもちろんのこと、制作したものをどこで発表すればPR効果が高いか、またどう説明すれば相手に伝わるかなどプレゼンテーションの学習にも力を入れた。ワークショップでの、一般の方々へ『教える』という行為は、教

える側が完全に技術を理解できていないと行うことができない。そのことから勉強会を開き、学習を重ねることで、制作技術や指導するポイントなど、伝える側としてかなり高いスキルを持った生徒も出てきた。

新聞をはじめとする各メディアに取り上げていただいたり、高松ケーブルテレビでCreative7の活動をまとめた30分の番組が制作されたりと、様々な活動を通して活躍できる場所が増えたことが生徒の自信や活動意欲を高めることに繋がっている。また、地域のたくさんの方々との交流により、地域産業を担う人材養成が期待できるようになり、地方課題の解決に貢献することができる可能性も出てきた。

#### (4) 生徒の変化

生徒たちは活動を通し、多種多様の素材を扱うことで、通常の学習活動では得られない素材感と制作に関する知識が得られた。また制作にあたり多方面の方々と協力することで多角的な考え方や、共同して考え制作することでコミュニケーション能力も飛躍的に向上した。さらに制作した作品を販売することで、作品の要点をまとめわかりやすく購買者に説明を行わなければならないため、プレゼンテーション能力の大きなスキルアップにも繋がったと感じる。



【国分寺グリーンフェスタでの接客】

#### 4 普及させたい取組と期待される効果

地域と密接に関わっている工業高校にできることを考えると、現代の社会情勢に合わせ柔軟な考え方の下、地域との連携も視野に入れ、生徒中心にもものづくりができる環境を作ることであるとを感じる。この取組みでは、科を超えて横断的に協力し各科の特性を生かしながら課題を検討することで、多方面から物事を見る力を養い、問題を解決し、新しく作り出す力を養うことができた。これこそが工業高校の最大の強みであり、工業高校の新しい一歩ではないかとも感じた。このプロジェクトで行った学習活動は、地域や社会に貢献できる人材を生み出す事に繋がるはずであると考え。



【組子障子の会社訪問と勉強会】

#### 5 課題及び今後の取組の方向

『Creative7』の活動は、校内のみならず、地域との繋がりを深め、実践的な職業教育を推進すると共に、地域産業を担う人材養成など地方に貢献する一つの方法と感じる。こうした取組みを一時的なものではなく、継続的に発展させていくことが課題であると考えている。



【むれ源平石あかりロード会場設営】

活動を通して、色々な作品を考案し制作販売してきたが、量産が主体となると、ものを創造し考え、生み出すといった作業時間が短くなってしまふ。今後は考え出すという根本の学習に時間を取るように心がけたい。この成果を生かし、さらに地域に貢献するため、ここで生み出した作品を商品として地元企業が生産・販売を担い、地域活性化の原動力となるように繋げていきたいところである。